

Title	宋代園林研究の現状と課題
Author	庄, 涵淇
Citation	人文研究. 69 卷, p.129-143.
Issue Date	2018-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	三上雅子教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

宋代園林研究の現状と課題

庄 涵 淇

宋代の園林は唐代の園林の特徴を踏まえて、中国園林史において芸術の頂点に至ったほどの存在であると言われている。園林を研究する際に、宋代園林は不可欠な一部分である。しかし、今までの園林史研究の成果をみると、宋代の園林より、明清園林に関心が集まり、建築学、美学、文化史などの視点からの成果が多く出されている。明清の園林は中国園林の到達点を示すと言うものの、園林全体を代表するわけではなく、園林研究を行う際に明清園林に大きな影響を与えた宋代園林について深く掘り下げる必要があると考えられる。そのため、本稿ではまず、明代の園林研究の現状について述べ、それを参照した上で、時代を遡る形で、主に1. 園林の公共性、2. 園林構造、造園手法、造園思想、3. 園林生活という三つの面から宋代園林研究をまとめて整理し、現在の研究の到達点を明らかにするとともに、未だ明確になっていない課題を明らかにする。最後に宋代園林研究の新たな方向性と可能性について述べる。

キーワード：宋代園林 公共性 造園手法 園林生活

園林とは何か？

袁守愚（2014）は園林について次のように述べている。「園林という言葉は後漢の班彪の『遊居賦』に最初に現れる。即ち「瞻淇澳之園林、美緑竹之猗猗」であり、竹の産地として有名な淇園を描いている。後漢から魏晉まで、「園林」という言葉は主に生産の場所を表現している。例えば「淇澳之園林」は竹の園である。両晉に、園林とは大量の樹木或いは果樹の園を指している」[袁 2014, pp. 17]。また、魏晉南北朝に仏教の経典を翻訳する時に「園林」はよく使われ、主に世俗の園林、僧侶修行用の園林、天神世界の園林に分けられる。また、前の時代と比べると、魏晉南北朝の「園」の機能は、生産から、娯楽及び日常生活に変化する傾向があったと論及しながら、先秦時代から魏晉南北朝までの皇家園林と私家園林の命名については、先秦以来、「囿」「苑」が皇家園林の命名にしか使えず、私家園林の名称は「園」「圃」に限られていたのに対し、魏晉南北朝に至ると、文人園林の山水審美への実践及び精神世界を深めた影響を受けて、皇家園林の命名にも「園」を使い始めたと述べる。

また、童寓（1963）、劉敦楨（1979）、陳從周（1984）、陳植（1988）、岡大路（1988）、王毅（1990）、周維權（1990）、張家驥（1991）、潘谷西（2001）、彭一剛（2005）、曹林娣（2005）、汪菊淵（2006）などの早期の先行研究において園林の概念が述べられているが、ほぼ同じよう

な定義を行っている。ただ、研究を通観すると、園林概念の範囲は次第に広がっており、「広義の園林は、定められた区域の中で、自然山水、地形或いは人工的に開かれた山水の地形を利用して改造し、植物の栽培と建物の配置を適合させて、人が観賞、息抜き、居住ができる環境を提供する場所のことである。それに対して、狭義の園林を定義すれば、即ち、伝統的古典園林を指す」¹⁾ という曹林娣の定義が最も適切と考えられる。

中国園林は、神話時代、先秦、漢代、六朝時代を経て、唐代に至ると造園技術がより成熟する。そして宋代の園林は、唐代の園林を踏まえて、中国園林史において芸術的頂点に至ったほどの存在であると言われている。さらに、造園の風潮は皇帝から士大夫層へと下降し、明代中期以後、江南において士大夫の造園ブームが起り、その園林は贅沢を極めた²⁾。今までの園林研究、特に明清園林に関する研究は、皇家園林、私家園林、寺観園林研究、ある地域全体の園林の研究、造園手法、造園思想、園林景観に関する研究など、様々な方面に及び、多くの成果が出されている。しかし、それと比べると、宋代園林の研究はまだ十分ではない。明清の園林は中国園林の到達点を示すとは言えるものの、園林全体を代表するわけではない。また、宋代園林は明清園林の造園技術、内部構造などに大きな影響を与えている。そこで、本稿ではまず、明代の園林研究の現状を述べ、それを参照した上で、時代を遡る形で宋代園林研究を整理し、新たな研究の可能性を述べることとする。

明代園林研究の方向

従来の明清の園林研究の多くは、揚州、蘇州などの江南の園林を取り上げ、建築学や美学の観点から園林の空間を分析している。また、文化史及び文学の観点によって明清園林を分析する研究も見られる。更に、園林の社会的、経済的機能、及び家族が園林で行った活動についての研究成果も少なくない。本稿では明代の園林研究を網羅的に紹介することは避け、宋代園林との差異を明らかにするために、代表的な研究成果を紹介する。

例えば、Joanna F. Handlin Smith (1992) は、祁彪佳による寓園の造成を例として、祁彪佳が園林を造った動機、及び社会交際の媒介としての園林の機能を中心として論じ、明末の江南社会が迎えた経済繁栄の状況の中で出現すると指摘する。士大夫の金銭に対する態度の変化、及び、その価値観の変化を検討した。更に、園林が備えている社会的機能及び政治関係、つまり、士大夫の人間関係と社会的声望の構造について、考察を加えている。高価な花木魚石を用いて造った比類ない園林の風景は、たえず著名な文人を引き寄せることになったが、それこそが祁氏の目的であったと指摘する。一方、クレイグ・クルナス (1996) は、庭園が社会的機能を備えるだけでなく経済的機能も持っているとは指摘するとともに、美学の観点のみから園林を分析する手法を批判している。巫仁恕 (2013) は社会経済の発展に従って都市化が促進され、園林は都市化と社会経済の発展の象徴物として理解すべきであると主張している。これらの研

究は園林の機能、園林での日常生活及び園林と社会経済との関係を研究課題としている。すなわち、従来の文学、文化、美学、建築学という枠を打ち破り、園林の社会的、経済的機能に着目している。明清の園林研究はこのような研究によって変化を遂げ、園林研究を新たな方向に導いたのである。

また、史料の新たな方向について触れておく。造園史料をめぐる研究成果として、例えば康格温（2010）は『園冶』を中心として、庭園主の造園的需要に応じるために造園するという立場から出発し、『園冶』に現れた園林の様子に基づいて、明代文人の庭園生活を論じている。さらに、荒井健（1994）は日記史料を用い、祁彪佳の生涯を紹介した上で、園林内の具体的な山、建物などの配置を明らかにした。寓園の順路に沿って49景を造った時期、場所、名前及び名前の出典、そして、各々の景勝地を詳しく紹介し、造園計画をはじめ、寓園への進出、宿泊、そして景勝の新造、移築、命名、造園協力者までを分析した。それとともに、『寓山志』の編集活動にも言及している。

さらに、私家園林における家族生活に関しては、曹淑娟（2006）は社会空間、文本空間（親族、友人たちが書いた寓園に関する文学作品を指す）、隠喩空間の三つの側面から寓園を分析し、祁彪佳が寓園に招待客を接待し、寓園の中で戯曲の鑑賞や詩文のやり取りなどの社交活動を行ったことを紹介した。そして、祁彪佳の作品である『寓山志』『寓山注』などを通じて、祁彪佳による寓園の造成を明らかにするとともに、園林というものが、園林主が作り上げた生命の一つの隠喩空間として存在し、遊覧客は園林に作り上げられた隠喩空間、つまり主人の内面的世界を訪れるのだと解釈する。また、園林の中の家族感情、女性空間を重視し、分析を行っている。以上の研究は、明代の造園史料や士大夫の日記や園林志などの史料を巧みに利用して、士大夫の私家園林の方位、構造、各々の景勝の場所、更に家族が毎日園林でどのように過ごしていたことまで、深く掘り下げている。これらの明代の園林研究の方向性を参照しながら、宋代園林研究の現状と課題を見ていくこととする。

宋代園林研究

宋代の園林は、宮崎市定が宋代の時代を「東洋のルネッサンス」³⁾と称したように、文化、芸術の隆盛期において発展し、その機能も前の時代より増え、明清園林の成熟の基礎を確立していった。しかし、明代の園林研究と比べると宋代園林に関する研究は、80年代に至ってようやく研究が始まり、2000年までには、周宝珠「金明池水戯与『金明池争標图』」（1984）、王鐸「北宋東京（開封）園林及其園史地位」（1992-1993）、丘剛、李合群「北宋東京金明池の營建布局与初步勘探」（1998）何徵「宋文人山水画对園林芸術的影響」（1998）など、北宋の園林を巡るいくつかの研究しか見出すことができない。しかもこれらは北宋園林の園林史的地位、造園手法、特徴、及び金明池を中心とする研究に止まっていて、具体的分析が少ない上、南宋

園林に関する研究はほとんど確認することができない。2000年以後、宋代園林研究は増えていき、多様な研究成果が出されるようになった。これらの園林研究成果を整理すると、主に園林の公共性、園林の構造、園林生活という三つの方面に分けられる。以下、各テーマに沿って概観する。

一、園林の公共性

周宝珠、丘剛、李合群は、北宋で最も「公共性」を体現している園林である金明池に着目し、そこで行われた「水戯」と呼ばれる水上戦の軍事訓練が、金明池が人気を集めた主要な理由であると述べる。さらに、竜の頭、尾を船首、船尾に飾って、真ん中に殿閣を数層に建てた大きな船を用いて「水戯」を演じたことでも、東京開封の人々に愛されることとなったと論じている。また、金明池は毎年の三月から一ヶ月ほど開放され、皇帝が臨席して「水戯」を見るのが一般的であり、張擇端の「金明池争標図」に描かれた龍船のパフォーマンスによって、当時金明池の開池の盛況及び東京市民の文化的生活が窺えると述べている。

また、その延長線上に、金明池の開放性、公共性を強調している研究として、董琦（2015）がある。董琦は金明池を例として、北宋皇家園林の公共性を論じた。この論文はまず、北宋東京の都市の水系、城壁、商店街などの環境を整理して北宋の経済的状况を論じながら、その町にある皇家園林への影響を分析して、公共的活動は北宋皇家園林において一般的な存在だと指摘している。また、金明池を例として、造られた経緯及びその開放性について述べて、開放される時に使用者は大体観覧客と、各種商業、娯楽のサービスを提供する人の二種類になるという。金明池の開放は北宋の社会経済を反映し、また、開放することによって北宋東京は繁栄、開放、平民化のイメージを示していたと論じている。

王勁韜（2011）は、古代の公共園林が春秋時代に出現したと論じ、早期の皇家園林を造成する際に「公共」「共有」「同楽」が主題となったことを示している。北宋の園林は中国歴史上最も開放性、市民化の特徴が備わった時代であると主張し、金明池を取り上げ、民衆が金明池での観覧活動及び商業売買などを通じて、「与民同楽」（皇帝が民と共に楽しむ）の理想が宋代皇家園林によって実現された、後世の模範となる場所であると述べている。また私家園林の開放、寺院に寄付したもとの私家園林の公共化についても、些か論及している。

そのほか、園林の公共性に関心を寄せる研究成果としては侯迺慧（1997）、劉樟緋（2013）、毛華松（2015）、程民生（2017）がある。

侯迺慧は、公園（即ち公共園林）が六朝に誕生してから、唐、宋に急速な発展を遂げたため、西湖での商売、娯楽活動、郡圃を楽しむことが宋代人の生活の一部となっていたとする。しかし、唐、宋の私家園林が芸術化された文人園林の方向に発展していたのに対して、公園は、ただ大きさを追求する存在であった。また、宋代の書院園林は、理学の発展と呼応する形で、もう一つの公園文化、即ち、理学文化を生みだしていった。これは、唐、宋時期の公園が、多元

的に発展し、各階層に浸透していたことを示すと述べる。

劉樟緋も郡圃に着目し、郡圃は唐代から出現し、主に官員の遊樂する場所を提供したが、宋代になると、開放性を備えて、民衆とともに楽しむ場所となったことを述べる。さらに、定州の郡圃を手がかりとして、北宋園林が公共性を備えるようになったこと、それが都市生活と深く関わりを有していたことを論じ、郡圃は宋代市民のために、遊樂の場所を提供したことを指摘する。

毛華松は建築学の視点から、名勝旧跡を研究対象として、公共園林（湖山風景区、都市の郡圃、都市の景勝地）を含む公共空間が盛んになった社会背景を分析した上で、公共園林の分布、機能の多様化についても指摘している。

程民生は汴京園林の果たした役割及びその特徴を述べる。まず、花木の移植技術が優れ、後世に深い影響を与えたこと、そして、皇家園林はそれまでの権力者に向くものから、不定期的に民衆に開放する場所となり、公共性の特徴が目立つようになったと同時に、統治者が民衆とともに楽しむことを表す場所となっていたことを主張し、さらに、統治者が園林を開放することを通じて、政治と繋がらせる機能を十分に発揮したと論じている。

以上の内容をみれば、宋代の皇家園林、郡圃、私家園林は定期的に民衆に開放されていたと考えられる。ただ、これらの研究が注目しているのは金明池、郡圃などの皇家、官庁の園林の公共性であり、私家園林の公共性についてはまだ十分に論じられていない。また、公共園林と園林の公共性の区別について十分に論じる必要があると思われる。

二、園林構造、造園手法、造園思想

多くの研究は宋代園林の構造、特徴、造園技巧などに着目している。また絵画を用いて園林を研究することも少なくない。

(1) 皇家園林

王鐸は（1992-1993）北宋園林の研究を行い、東京の園林の分布、構造を論じた上で、それらの園林史における地位を分析している。まず、社会機能面から見ると、北宋には観覧、娯楽活動をメインとする皇家園林が現れ、さらに艮嶽のような大型山水宮苑も園林史に先鞭をつけた。また、皇家園林に畑や薬草園を設置すること、多くの珍しい動物を飼うことも、北宋から発展したと述べる。

倪峰（2006）は宋代園林の種類及びその芸術的特徴を纏めている。宋代園林は主に皇家園林、文人園林、自然郊外園林、寺観園林に分けられるが、その中で最も重要であるのは皇家園林と文人園林であると見做す。艮嶽を例として皇家園林の特徴を分析し、艮嶽は山、水を軸にして、景観を観覧する場所は多く室内に設置され、建物は地勢、景勝に従って建てられており、唐以前の風格とは異なっていたと述べる。それに対して文人園林には一定の枠がなく、曲がりくねっ

た地形を選択したり造ったりし、各々の景勝地は、自然に近く、変化に満ちた空間であると論じている。また、園林に込められている儒、仏、道の思想にも言及する。

秦宛宛（2007）は北宋皇家園林の概況及びその造園手法を論じる。北宋の園林は隋唐の園林と比べると規模が小さく、人工的に造られた景観が多い。また造園技術が進歩するとともに、園林の機能が多様化し、園内の建物や飾り物がより精巧に造られるようになった。また、北宋前期の皇家園林には農作物を多めに植えたが、後期になると、宴会、接待する場所を設置したほか、運動や文化的活動、さらには宗教的活動を行う場所も現れる。さらに、北宋皇家園林が南宋及び明清の皇家園林の造園手法への影響を与えたこと、北宋皇家園林が朝鮮及び日本の園林に影響を及ぼしたことを明らかにする。

朱俊青、房淑娟、段佳卉、蘇樂金（2015）は、北宋の皇家園林が文人化する趨勢があり、自然風景に近いことを求める文人園林の特徴が見られること、また、景勝によって精巧な建物を建てる、園林内に農産物を植える、土と石の双方を用いて築山を造るなどの特徴を指摘している。

(2) 文人園林（或いは文人化園林）

丁林峰（2012）、董慧（2013）、王巧、余鵬、侯方堃（2015）、張希、李鑫、吳靖雪（2015）などの研究が出されているが、ここでは董慧、丁林峰と張希、李鑫、吳靖雪の論文を紹介する。

董慧は両宋の文人化園林に着目している（文人化園林とは文人によって経営される、或いは所有される園林を含むのみならず、文人の趣を有するすべての園林をさす）。宋代の士大夫は社会的地位が高く、彼らの行為や好みは摸倣の対象となっていた。そのため、私人園林にしても、皇家園林、官庁園林、寺院園林にしても、文人化の傾向が見て取れると述べる。文人化園林の構造の特徴は、自然を臨模することである。また、造園手法、多様な社会的機能について論じ、文人化園林は文人、士大夫たちに宴会場所を提供し、公共性を有していたこと、そこに体現される禅学、理学の思想、及び文人の園林生活を論じている。

丁林峰は宋代園林の自然景観と造園理論について論じつつ、実用性と造園の原則から研究する。そして、築山、理水、花木などによって宋代園林の山水美感を分析し、宋代言人の園林生活に論及する。宋代の文人園林は観覧、宴会及び休養場所として使われただけでなく、文人が自分の精神的世界を営む場所であり、また、儒仏道の影響を受けて、宋代人は園林を通じて人と自然を調和させることができたことと述べる。

張希、李鑫、吳靖雪（2015）は、宋代言人が芸術を重視したこと、経済の繁栄、科学技術の発達、詞曲の発展、などの要因によって宋代言人園林が形成されたこと、宋代言人園林が上品であり奥深い境地を有していたなどの特徴について論じている。

程磊（2017）は園林の文化的機能を中心として論じている。園林は士大夫の本性を回復させたり、彼らの内心と社会及び自然宇宙の関係を調和させたりする機能を有していたため、士大

夫が政治と道義のバランスを取ることが可能となり、その人格、信仰が集権政治の影響を受けても崩壊することがなかったと論じている。

(3) 私家園林

張瑤（2014）は、李格非の『洛陽名園記』の中に記載された私家園林を中心として研究を行っている。まず、洛陽の地理、歴史、政治、経済、文化を分析してから、北宋園林が盛んになった理由を明らかにし、さらに各々の園林の園林主、場所、規模、構造を考証し、一部の園林の復元図を描いている。その上で、園林の類型、構成の要素、園林活動、園林の機能を論じ、北宋園林の借景を主に使う造園手法及び自然風景と追求する美意識について究明している。また、北宋の園林には半開放性が備わり、自然山水と文人の趣、雄渾と優雅さを兼ねている特徴があると述べる。

同じく私家園林に目を向けた成果として、徐燕（2007）は南宋の私家園林を中心として研究を展開している。私家園林が発展していた歴史的背景を分析した上で、宋代の経済、文化の盛行が造園に有利な条件を提供したこと、また、理学が南宋私家園林の造園手法に影響を与えたことを述べるとともに、園林の構造や文人が私家園林で行った日常活動について論じている。

(4) 両宋園林の比較

尹家琦（2008）、江俊浩、沈珊珊、盧山（2013）等は、北宋と南宋の園林の比較研究を行っている。

尹家琦は、宋代南北の園林の造園手法を比較しながら、主に三つの相違点を挙げる。第一に、北宋の園林の多くは皇族に使われていたのに対して南宋の場合は士大夫が造った私家園林が多数を占めていた。また、北の園林が大規模であったのに対し、南の園林は小規模であった。さらに、北の園林の重厚、全体性を求める傾向性に対して、南の園林は秀麗、優美を追求していた、と論じている。

江俊浩、沈珊珊、盧山は、両宋園林の変化から南宋園林の特徴を論じた。具体的には、北宋園林と比べると南宋園林は精巧になり、変化が多く、植物の栽培技術が成熟した結果、園林の花木が生い茂り誰でも鑑賞して楽しめるようになった、と論じている。

以上の研究成果を概観すると、皇家園林を重視する研究傾向が強く、私家園林及び両宋園林の比較についての研究はまだ少ない。私家園林と文人園林については重複する部分が多く、今後は文人ではない人によって造られた私家園林に目を向ける必要がある。

(5) 絵画史料

近年、絵画を史料として園林研究に用いる傾向が増えており、何徵（1998）、劉国勝（2006）、王棟（2008）、牡丹妮（2011）、郭菲（2014）、程莉（2015）、許可（2016）、朱翥（2016）、毛華

松、梁斐斐、張楊斑（2017）などの研究が出されている。

何徹は、山水画が最も早く最も直接的に園林に影響を与えた可能性があるという。一番の影響は、自然の形態を園林に写すことである。そして、自然を臨模するが、自然を超える「都市山林」を造り、絵画、美学、生態、建築などの要素を上手く組み合わせて、自然に基づく現実生活中的「仙境」を創り出したと論じる。

劉国勝は、宋画に基づき、築山、理水、植物、飾り物などの園林の要素を分析している。宋代園林の築山はいつも重要な場所に置かれて、その周りに木や花草を配置する。理水は主として、(1) 外部の水風景を園林の背景として利用する類型、(2) 園林内部に池を造る類型、(3) 園林内部に溪流を造る類型、の三種類に分けられること、さらに宋代園林の植物と飾り物も非常に豊富であったことを明らかにし、建物の室内の構造、家具などにも論及している。

王棟は、詩画芸術が文人園林に重要な影響を与えたと見え、宋代人が注目していたのは造園の内核、つまり、園林の境地であったと述べる。

朱翥は、南宋文人園林が盛んになった理由を三点挙げている。まず、士大夫層が当時社会の主流であったこと、次に、江南地域は山水が交錯し環境がよかったこと、最後に、南宋は中原文化と南方文化が融合する重要な時期であったことである。南宋時代の皇家園林、私家園林、寺観園林は次第に同じ方向を目指していて、文人園林が主流の園林形式となっていく。また、『四景山水図』に基づいて、南宋文人園林の特徴は、(1) 園林は多く郊外の水や山に臨む場所に造られ、自然に近い構造が一般的である、(2) 四季の景色を重んじる、(3) 園林空間を順々に進むように造られたことこの3点であるとする。南宋文人園林の景勝構成に関しては文人の私家園林に限らず、臨安の皇家園林、寺観園林なども文人園林の特徴を備え、その造園の手法が各類型の園林に相応するものであったこと、さらには美学芸術の視点から、山水図の画風の変化が造園手法にもたらした影響について述べている。

宋代人は文学や文化、絵画に造詣が深く、絵画から直接に園林の構造、人物の活動、建物、植物などを窺うことができるという利点があり、園林空間を分析する上で大きな役割を果たしている。しかし、宋恬恬、沈欣悦、鮑沁星（2017）は『陶淵明帰隠図巻』、『婦去来辞書画卷』、『西塞漁社図』などを例にして、宋画の史学的価値を論じている。今まで絵画と関連している宋代園林はまだ発見されておらず、宋画と宋代園林の营造との関わりもはっきりしていないという意見も出されている。絵画史料の信頼性に関して宋画に描かれた園林は明代の画よりありのままに描くことが多いとし、絵画史料から、造園の時に園林の構造を重視し、山、水、植物、建物など各々の区域の景勝を独立させる傾向にあったことを明らかにしている。

(6) 考古学の成果

最近出された鮑沁星（2016）の著作は南宋園林を研究している。南宋園林の造園思想は、前の時代の「世と隔絶」するという思想と異なり、「観覧」を旨として、皇家園林から私家園林

まで西湖の構造を模倣することが高く評価されていたと述べる。また、考古学の視点から、遺跡から園林の性質、園林主に関する情報、園林の構造、造園手法、築山、方池、方位などを明らかにしている。さらに、南宋園林の「靈隱寺飛來峯」を模倣して築山を造る現象を論じ、皇家園林が築山を重んじたことが南宋の築山文化を推進し、それらの築山の名前も「飛來峯」とした例が少なくなかったという。さらに、南宋の皇家園林、私家園林、官庁園林、寺観園林、郊外理景を全面的に整理し、園林の場所、園林主及びその園林の特徴などを詳述している。

同じく遺跡に注目しているのは張敏霞（2015）である。張敏霞は、浙江省の石門鎮に発見された南宋の名園である張氏東園の遺跡を通じて、その園林の盛衰を究明し、東園の特徴、年代、園林主及び園林の構造について考証している。

近年、遺跡の発掘が相次いでおり、遺跡の発掘は園林の復元や、宋代人の生活を理解することにおいて、文献資料では行うことができない重要な役割を果たしている。

三、園林生活に関する研究

楊曉山（2009）は、中唐から北宋まで（9世紀～11世紀）、都市にある私人園林での生活を詩歌によって再現している。蘇軾を例にして、士大夫たちが互いに貴重な物品の交換を通じて交流を行ったことを論じ、邵雍と司馬光の私人園林における生活態度を比べながら、洛陽の私家園林は彼らに本心を述べられる場所を提供したと指摘する。

侯迺慧（2010）は、宋代園林について歴史背景、社会背景、美学的背景、文学的背景から、造園手法、園林生活及びその文化的意義などまで様々な方面から論じており、全面的に宋代園林を分析している数少ない著作と言える。西湖、良嶽など宋代の著名な園林及び官庁の郡圃を取り上げて論じた上で、前代の造園技巧と比べながら、宋代園林構造の発展と変化、園林で行われた活動の変化を詳しく分析し、園林が儒仏道三教合一の道場となり、自然と人文を融合させ、宋代人の心の修養、文学創作に対して豊富な空間と資源を提供したことを明らかにしている。また、宋代園林が「樂園」と見なされていたことについて、その理由を次のように述べる。(1) 園林には豊富な物産があるため、自給自足ができる。(2) 景色が美しく、人と争わない特質がある。(3) 囲碁を打ち、茶を飲むなどの活動をしながら、悠々自適の生活をする事ができる。(4) 独立の空間であり、ある程度、俗世を離れることができる。

梁建国（2012）は、士大夫の間の交際、宴会、園林の観覧、贈り物の応酬などの私人空間の面から北宋東京士大夫の宅園について考察し、士大夫の日常生活及び当時の社会文化を検討している。また、園林にある珍しい植物、ペット、蔵書、文物などについて分析を行い、士大夫たちが植物、ペットを巡って詩を作り、美しい風景を楽しむとともに、互いに感情を交流しあったと述べている。また文物鑑賞も士大夫の遊園活動の一つであり、絵画、書籍などの貴重な収蔵品を示された人の社会的地位及び彼らと園林主との親しい関係性を読み取れると述べる。

曾維剛、鉄愛花（2012）は、張鑑の南湖別業を例として、園林空間が文学の生成に与えた影

響を論じている。両宋時期に私家園林が盛んになるとともに、宋代文人の交遊、休養空間が広げられ、園林が文学活動を行う重要な場所となった。園林を中心とする詩文創作が日常の美学と繋がり、宋代詩文の発展を促し、文学史的には独特の意義があるという。また、張鑑が園林において歌姫を招いて客をもてなす活動、友人と花を楽しみながら酒を飲んで詩を作る活動、送別会を開く活動などによって、南湖別業は張鑑の個人的休養の場所だけではなく、彼の社交的空間であり、友達と文学活動を行う場所でもあったことを指摘する。

章輝（2016）は、経済が発達し、官吏の余暇時間が増え、のんびりと過ごす気風が広まり、南宋園林が盛んになっていたと述べ、士大夫の園林に行った娯楽活動について論じ、南宋園林は休養空間であると同時に、美学的価値も備えていたことを明らかにしている。南宋の私人園林はただ人を楽しませる機能を備えていただけではなく、「天人合一」に代表される哲学、美学思想を表した。園林はより小さく、封鎖的な空間において、自然と交流することができる場所であった。その美学価値は建物や飾り物に工夫をし、収蔵、歌、踊りなど各々の芸術を併せ持っており、南宋園林は自然の美、人工的美、社会生活の美、文学芸術の美を体現するものであったと述べる。

常衛鋒（2006）は、北宋東京園林及びその周辺地域の苑、園、楼、台などの遊楽と休養ができる景勝に着目し、皇帝、官僚、士大夫、平民、外国使臣など各階層の人の遊園活動について論じ、遊園活動の具体的内容は祭祀、観賞、宴会、演出、宗教的参拝であったこと、及び北宋の園林が後世や日本の造園に与えた影響を明らかにしている⁴⁾。

以上の研究は、園林生活について目を向けており、宋代文人の生活や園林の機能を理解する上で重要な意義を有している。ただ、こうした研究はケーススタディーの積み重ねが必要であり、士大夫の園林における交遊についてはさらに具体的に検討を行う必要がある。

四、その他

1. 植物、飾り物、山、水などの園林要素に関するミクロ的視点

例えば、植物の栽培について、舒迎瀾（1989）は宋代蘇州、杭州の園林花卉の種類及びその栽培技術について論じている。また、張鵬、劉曉明（2016）は、宋代園林の植物の種類を研究し、薬類、経済類、さらには、宗教類の植物までもが含まれていた。園林主は自分の身分に従って異なる種類、用途の植物を配置し、植物の選択が観賞のためだけではなく、税収、薬用、農書、花譜などの経済的、文化的配置と関わっていたと述べる。齊君、郝娉婷（2016）は、植物の伝承と発展を論じている。

また、郭東閣（2013）は、北宋洛陽の私家園林の「景題」を対象として研究を行っている。「景題」とは園林の名称、園林にある建物、景勝の名称を指し、「景題」の意味、修辞手法、中に含まれる園林主の思想などについて詳しく論じている。

そのほか、尉遲芋樹（2016）は、宋代山水園林の水の運用、及び水と園林構造の関係に着目

している。王勁韜（2009）は、皇家園林の「疊山」（築山を造ること）を研究している。

宋代園林の要素を詳しく分析することは園林研究にとって不可欠な探究だと考えられる。しかし、ミクロな視点から行われた宋代園林をマクロな視点からの研究と比べると、数量、内容的に見劣りする。ミクロ的研究は、マクロ的な視点を同時に併せ持ちながら、園林の要素の発展や変化を掌握することが求められる。

2. 宋詩、宋詞

賈鴻雁（2002）は、宋詞に現れた園林構造を分析している。宋代において園林が普及し宋詞の対象となっていたと見做し、園林の建物、飾り物、山水、花草などが宋詞の境地と主題を際立たせていたと論じている。

羅燕萍（2006）は、宋詞の中に言及された園林を考察した上で、園林という視角から宋詞を分析し、また園林と宋詞の相互影響について論じている。徐海梅、劉尊明（2009）は、宋詞から、宋代士大夫が園林を造る際の伝統的文化への追憶を見出すとともに（例えば、蘇軾は詞の中で陶淵明に言及した）、詞は、景勝の美しさより、むしろそれらの景観の文化的背景、意味及びそれに関わる故事を伝えることを狙いとしていたと述べる。

朱湘、蔣曉娟（2009）は、宋代言人の思想、文学的美が造園活動に浸透し、造園思想や精神に影響を与えたと述べる。李霞（2009）は宋詞から園林の景勝及び文人の園林生活を分析し、張震英、雷艷平（2013）は宋詞に基づいて、園林における女性の日常生活を分析している。明清園林の研究成果と異なり、宋代園林における女性の園林活動は主に精神的趣から論じられている。李小奇（2016）は唐詩が宋代園林に与えた影響を分析している。

宋詩、宋詞と園林とは切り離すことができない関係にある。宋代人は園林において文学作品を作り、園林は文学作品によってその内実と境地をアピールする。つまり、詩詞から園林の内面的世界を読み取ることができ、園林研究を充実させることに繋がる。

今後の研究課題

宋代園林研究は明清園林研究とは異なり、現存している園林が少なく、文献史料、絵画史料や遺跡に依存するため、明清園林のように深く研究できていない。また、宋代園林を経済的機能の方面から論じることは難しく、家族が園林に行った活動についても研究し難い。2000年以後、宋代園林研究は増加する傾向があるが、研究の視点は類似しており、使われている史料も限定されている。今後の宋代園林の研究方向について、以下の四点を指摘しておく。

1. 史料

上述のように、今までの宋代園林研究の史料の多くは園林記、宋詩、宋詞などに限られてい

る。宋代園林を研究するには新しい史料の発見が重要となる。例えば、日記、手紙、序、題、跋などの史料の活用が必要であり、園林研究に新たな道を開くと考えられる。

2. 士大夫の交遊活動

上述の研究の中に園林における士大夫の交遊についての研究があるが、数量的には限られている。1の問題とも関わるが、2015年6月12・13日、台湾の長庚大学にて「游於芸：十一至十四世紀士人的文化活動与人際網絡」国際学術研討会が開催されている。この研討会で課題とされたテーマの一つが宋元期の士大夫の多彩な文化活動と交際の問題であり、そのために文集所載の多様な資料の活用が主張された。交際において、例えば、手紙が重要な史料であることは、文学、思想史などにおいてはすでに共通の認識となっているが、歴史学においても、手紙の活用が喫緊の課題となっている⁵⁾。

3. 宋代園林空間の機能

今までの研究をみれば、宋代園林の文化的、美学的、社交的、政治的な多様な機能、或いは開放的な特徴が明らかにされている。しかし、宋代は経済が発達し、政治的にも士大夫の地位が高く、彼らの文学、芸術の造詣は他の時代の比ではない。このような社会背景の中において、園林がどのように宋代人に利用されたかについて討論する必要がある。例えば、書院の発達も宋代以後の現象であり、学術、教育の機能などに目を向ける必要があろう。また「靖康の変」によって分けられた北宋と南宋の園林は形や構造だけではなく、中国の南北の地理的な環境も異にしており、その機能がどのように変化したかについても検討すべきである。

4. 宋、明の園林の比較

宋、明の園林研究を比べれば、宋代の研究は公共園林、とりわけ皇家園林の開放の問題に多くの研究者が注目しているのに対して、明代は私家園林に関する研究が殆どである。宋代は公共園林が発達し、明代は私家園林が盛行していた時代と言うことになる。この理解が妥当であるのか検討するとともに、明代園林が宋代園林からどのような影響を受け、変化していったのか、両者の比較によって初めて中国園林史の重要な段階が明らかとなる。

注

1) 「広義的園林指在一定的地段範圍内,利用並改造天然山水、地貌或者人為地開闢山水地貌、結合植物的栽植和建築布置、從而構成一個供人們觀賞、遊憩、居住的環境。狹義的園林觀念,則是專指傳統古典園林。它具有廣義「園林」的基本內涵、但又有獨特的藝術個性、即對一定的地段範圍的選擇和對該地段環境的改造、必須是通過整體的藝術構思規劃並通過藝術的手段和工程技術完成的、因而創造出來的自然環境具有審美意義。」曹林娣2005『中国園林文化』、中国建築工業出版社、p. 3

2) 陳宝良 2004『明代社会生活史』、中国社会科学出版社

3) 宮崎市定 1940「東洋のルネッサンスと西洋のルネッサンス」(上)『史林』第25巻第4号、pp. 465-

- 480、1941「東洋のルネッサンスと西洋のルネッサンス」(下)『史林』第26巻第1号、pp. 69-102。
 4) 同じ方法で陳灝(2013)は南宋臨安園林を研究している。
 5) 平田茂樹2016「学会レポート「游於芸：十一至十四世紀士人の文化 活動與人際網絡」国際学術研究会参加記」『都市文化研究』18、pp. 107-110 参照。

参考文献

1. 単行本

－和文

クレイグ・クルナス著、中野美代子、中島健訳 2008『明代中国の庭園文化：みのりの場所/場所のみのり』、青土社(原著として Craig, Clunas. 1996. *Fruitful Sites: Garden Culture in Ming Dynasty China*, Duke University Press, Durham.)

－中文(年代順)

- 童寯 1963『江南園林志』、中国建築工業出版社、北京
 劉敦楨 1979『蘇州古典園林』、中国建築工業出版社、北京
 陳從周 1984『說園』、同濟大学出版社、上海
 岡大路 1988『中国宮苑園林史考』、農業出版社、北京
 陳植 1988『陳植造園文集』、中国建築工業出版社、北京
 周維權 1990『中国古典園林史』、清華大学出版社、北京
 張家驥 1991『中国造園論』、山西人民出版社、太原
 侯迺慧 1997『唐宋時期的公園文化』、東大図書、台湾
 潘谷西 2001『江南理景芸術』、東南大学出版社、南京
 彭一剛 2005『中国古典園林分析』、中国建築工業出版社、北京
 汪菊淵 2006『中国古代園林史』、中国建築工業出版社、北京
 曹淑娟 2006『流變中的書寫－祁彪佳與寓山園林論述』、里仁書局出版、台湾
 楊曉山 2009『私人領域の変形－唐宋詩歌中の園林と翫好』江蘇人民出版社、江蘇
 侯迺慧 2010『宋代園林及其生活文化』、三民書局出版、台湾
 巫仁恕 2013『優游坊廂：明清江南城市の休閒消費と空間変遷』、台湾中央研究院近代史研究所、台湾
 鮑沁星 2016『南宋園林史』、上海古籍出版社、上海

2. 論文

－和文

荒井健 1994「明末紹興の庭－祁彪佳と寓園について」『中華文人の生活』、平凡社出版、pp. 434-468

－英文

Joanna F. Handlin Smith. 1992. *Gardens in Ch'i Piao-chia's Social World: Wealth and Values in Late-Ming Kiangnan*, *The Journal of Asian Studies* 51(1) pp. 55-81.

－中文(年代順)

- 周宝珠 1984「金明池水戯与『金明池争標図』」『中州学刊』第1期、pp. 87-91
 舒迎瀾 1989「宋代蘇杭の園林と花卉栽培」『古今農業』第1期、pp. 62-69
 王鐸 1992「略論北宋東京(今開封)園林及其園史地位」『華中建築』第10巻第4号、pp. 43-45
 王鐸 1993「略論北宋東京(今開封)園林及其園史地位(続)」『華中建築』第11巻第2号、pp. 47-51
 王鐸 1993「略論北宋東京(今開封)園林及其園史地位(続)」『華中建築』第11巻第3号、pp. 55-57
 丘剛、李合群 1998「北宋東京金明池の宮建布局与初步勘探」『河南大学学报(社会科学版)』第38巻第1号、pp. 12-14
 何徵 1998「宋文人山水画对園林芸術の影響」『浙江林学院学报』第15巻第4号、pp. 445-449
 賈鴻雁 2002「宋詞園林意境美探微」『東南大学学报(哲学社会科学版)』第4巻第5号、pp. 75-79
 歐陽勇鋒、蔣穎、張延龍 2005「中国伝統文化对宋代園林の影響」『西北農林科技大学学报(社会科学版)』第5巻第3期、pp. 117-119

- 田志堅 2005 「宋代写意山水園林与山水美学芻論」『重慶社会科学』第 11 期、pp. 67-73
- 常衛鋒 2006 「北宋東京園林景觀与遊園活動研究」、河南大学研究生碩士學位論文
- 倪峰 2006 「宋代園林藝術探微」『湖南行政学院學報（双月刊）』第 2 期、pp. 81-82
- 羅燕萍 2006 「宋詞与園林」、蘇州大学博士學位論文
- 劉國勝 2006 「宋画中的建築与環境研究」、河南大学研究生碩士學位論文
- 徐燕 2007 「南宋臨安私家園林考」、上海師範大学人文与傳播学院碩士學位論文
- 秦宛宛 2007 「北宋東京皇家園林藝術研究」、河南大学研究生碩士學位論文
- 尹家琦 2008 「試比較宋代南北方的造園藝術」『安徽建築』第 6 期、pp. 196-197
- 王棟 2008 「螻蟻之余 便有遠韻—從宋代山水畫探微文人園林造景」、中国美術学院碩士學位論文
- 李霞 2009 「從宋詞看中国文人園林的意境」、河北大学碩士學位論文
- 徐海梅、劉尊明 2009 「淺談宋詞与宋代園林文化」『文学史話』第 4 期、pp. 73-82
- 朱湘、蔣曉娟 2009 「論中国文人和文学对園林的影響」『山西建築』第 35 卷第 33 期、pp. 350-351
- 王勁船 2009 「中国皇家園林叠山研究」、清華大学建築学院工学博士學位論文
- 康格温 2010 「《園冶》与明代江南的文人園林」、シンガポール国立大学博士學位論文
- 牡丹妮 2011 「宋代園林詩画情趣特色探析」『晋城職業技術学院學報』第 4 卷第 3 期、pp. 94-96
- 王勁船 2011 「中国古代園林的公共性特徵及其对城市生活的影響—以宋代園林為例」『中国園林』第 5 期、pp. 68-72
- 梁建国 2012 「北宋東京士大夫的宅園環境與交遊生活」『隋唐遼宋金元史論叢』、pp. 298-307
- 曾維剛、鉄愛花 2012 「園林別業与宋人休閒雅集和文学活動—以杭州張鉉南湖別業為中心的考察」『浙江學刊』第 5 期、pp. 102-110
- 丁林峰 2012 「宋代文人園林的文化意蘊」、安慶師範学院碩士學位論文
- 董慧 2013 「兩宋文人園林研究」、中国社会科学院研究生院碩士學位論文
- 陳灝 2013 「南宋臨安園林景觀及遊園活動研究」、河南大学碩士學位論文
- 江俊浩、沈珊珊、盧山 2013 「從兩宋園林的变化看南宋園林藝術特徵」『中国園林』第 4 期、pp. 104-108
- 郭東閣 2013 「北宋洛陽私家園林景題的特色分析」、河南農業大学碩士學位論文
- 劉緯緋 2013 「北宋城市園林的公共性轉向—以定州郡園為例」『河北大学学报（哲学社会科学版）』第 38 卷第 3 期、pp. 23-28
- 張震英、雷艷平 2013 「閨閣園林間的淺吟低唱—從宋詞看宋代閨閣的園林情調」『學術論壇』、pp. 73-83
- 許江 2014 「宋代造園藝術与園林建築特徵之窺探」『創意与設計』第 2 期、pp. 83-93
- 袁守愚 2014 「中国園林概念史研究：先秦至魏晋南北朝」、天津大学博士學位論文
- 王風揚 2014 「宋人動物飼養与休閒生活」華東師範大学古籍研究所碩士學位論文
- 郭菲 2014 「宋代画論中的園林觀研究」天津大学碩士學位論文
- 張瑤 2014 「『洛陽名園記』中的園林研究」、天津大学非全日制專業學位碩士學位論文
- 蔣磊 2014 「宋代文人園林造景手法及对現代園林造景的啓示研究」、河北農業大学全日制碩士專業學位（卒業）論文
- 王巧、余鵬、侯方堃 2015 「一派雅致天然—淺談宋代文人園林」『四川建築』第 35 卷第 1 期、pp. 11-15
- 朱俊青、房淑娟、段佳卉、蘇樂金 2015 「北宋東京皇家園林造園藝術分析」『林業調查规划』第 40 卷第 3 期、pp. 127-132
- 張敏霞 2015 「南宋私家園林石門張氏東園遺址考」『中国園林』第 7 期、pp. 88-91
- 董琦 2015 「北宋皇家園林「公共性」探究—以金明池為例」、北京林業大学碩士學位論文
- 毛華松 2015 「城市文明演變下的宋代公共園林研究」、重慶大学建築城規学院博士學位論文
- 程莉 2015 「從宋代山水畫淺析宋代造園藝術」『現代園藝』第 7 期、pp. 141
- 張希、李鑫、吳靖雪 2015 「宋代園林—文人園林的特点及借鑑意義」『北京農業』第 9 期
- 章輝 2016 「南宋文士的園林休閒及其審美蘊藉」『美与時代』第 5 期、pp. 14-17
- 朱翥 2016 「『四景山水圖』中的南宋文人園林造景手法探討」『風景園林』第 2 期、pp. 102-108
- 張鵬、劉曉明 2016 「对宋代園林植物配置的再認識」『建築与文化』第 9 期、pp. 206-207
- 尉遲芊樹 2016 「水与宋代山水園林」『濰坊工程職業学院學報』第 29 卷第 4 期、pp. 91-92

- 許可 2016 「宋代文人詩画对文人園林の影響」『現代園芸』第 8 期、pp. 113-115
- 齊君 2016 「宋代園林自発性類型学研究」『中国園林』第 32 卷第 12 期、pp. 112-116
- 李小奇 2016 「唐詩对宋代園林空間芸術建構の影響－以宋代園記散文為考察中心」『暨南学報（哲学社会科学版）』第 4 期、pp. 64-71
- 齊君、郝娉婷 2016 「宋代城市及園林植物的傳承与演變」『中国園林』第 2 期、pp. 112-116
- 宋恬恬、沈欣悦、鮑沁星 2017 「略論宋画的園林史料價值－以『陶淵明歸隱図卷』、『婦去来辞書画卷』、『西塞漁社図』等宋画為例」『風景園林』第 2 期、pp. 40-46
- 程民生 2017 「北宋汴京の園林貢獻及「緑政」創舉」『河南師範大学学報（哲学社会科学版）』第 44 卷第 1 期、pp. 63-71
- 程磊 2017 「論宋人山水亭園的文化功能」『中国海洋大学学報（社会科学版）』第 1 期、pp. 122-128
- 蒋熠、李莉、崔田、喻毛艷、鄧黎 2017 「宋代隱逸文化在士人園林中的運用－以小隱園為例」『現代園芸』第 2 期、pp. 131-132
- 毛華松、梁斐斐、張楊琿 2017 「宋画中的園林活動与園林空間關係研究」『西部人居環境学刊』第 2 期、pp. 32-39

【2017 年 8 月 31 日受付，11 月 10 日受理】

The current state and issues of research on gardens in Song dynasty

ZHUANG Hanqi

Many scholars agree that the art of the Chinese garden reached its pinnacle during the Song dynasty. Song dynasty gardens inherited the characteristics of Tang dynasty gardens. However, many studies have instead given their attention to Ming-Qing gardens. Ming-Qing gardens have been studied from a variety of perspectives, including those of architecture, aesthetics, and cultural history. Although there is wide acknowledgement that the Ming-Qing type represents the ideal Chinese garden, a comprehensive understanding of Chinese garden development must be obtained through broader study. When studying Chinese garden history, there is a great benefit to the exploration of garden development during the Song dynasty, especially since the gardens of the Song dynasty had a significant influence on Ming-Qing gardens. This paper intends to study thoroughly on the contributions of the Song dynasty garden, and starts with a survey of previous studies involving them. First, this paper discusses the research findings of studies on Ming gardens. Then, it sorts previous studies on Song dynasty gardens into three categories, as follows: 1. Publicness of the gardens. 2. Garden structure and construction from technical and ideological aspects. 3. Leisure time spent in the gardens. By organizing the research in this way, this paper reveals some of the problems that researchers need to address when examining Chinese garden history. Based on these findings, this paper discusses the future of Song dynasty garden research in the conclusion.

Key words: Song dynasty gardens publicness construction leisure time in gardens